

# 見えない国際協力 —肌でしか感じられないこと—

藤島 誠人(岡山県 学生)

## ●はじめに

私は、大学の国際ボランティアサークルでカンボジアの孤児院へ教育支援をしており、東南アジアへの興味は人一倍ありました。そんなとき、地元の図書館で「国際協力レポーター2014」のポスターを見て募集を知りました。この機会に東南アジアの国の一つである東ティモールに足を運び、国やODAの現状を自分の目で見てみたいと思い、応募しました。

また、私は、来年度より小学校の教員となる予定です。これまで知り合いの教師や大学の友達など自分の身近な人たちが青年海外協力隊で活躍してきたのを見てきて、昔からいつも青年海外協力隊に憧れを持っていました。そのため、自分が小学校教員となり実務経験を何年か積んだ後、青年海外協力隊として自分の持っている何かを伝えにいきたいと思っています。そこで今回、国際協力レポーター2014に参加することで、何か自分にとって将来のヒントになるのではないかと思います。参加を決意しました。

## ●東ティモールって？

私が国際協力レポーターとして東ティモールに行くことが決まったとき、先生や家族、友人には「どこにあるの?」、「エボラ出血熱大丈夫?」、「紛争やデモなども大丈夫なの?」と質問され、周囲の人々にとって東ティモールの認知度がとても低かったように感じました。私も東ティモールという言葉は聞いたことはありますが、その内の東ティモールがどんな国なのかは全く知りませんでした。

事前調査では、東ティモールの面積は首都圏の東京、千葉、神奈川、埼玉を足した面積とほぼ同じ大きさで、人口は約121万人でした。主要産業は農業ですが、国益のほとんどは油田による収入でした。また、東ティモールは複数の国に植民地化された過去があり、少し前まではインドネシアから独立しようと争い、紛争を繰り返していました。その中では、たくさんの虐殺なども行われ、悲しい過去があります。複数の国に植民地化されることにより、複数の言語が現在も残っていることがわかりました。このように、たくさんの課題が見える中で、自分が現地に出向き、国際協力をしている日本人がどのようにその国に貢献しているのかを見たいと思いました。

## ●視察前の心境

国際協力レポーターの目的は、日本のODAが多くの開発途上国で使用されている割にはその事業の内容や成果といったものが日本の国民に知れ渡っていないため、日本のODAが本当に役に立っているのか、相手国に感謝されているのかを実際に現場を視察し、それを日本人に伝えることです。私自身も日本のODAの使われ方や内容、成果などを考えたことがあまりありませんでした。調べてみると、2014年のODA予算が約5500億円であり、国民1人あたり約4500円も負担していることがわかりました。さらに、自分が負担している4500円がどう活用されて、どんな成果をあげているのかとても興味を持つことができました。日本人のODAに対する考えというもの、良いことばかりではないと思います。むしろ、もっと減らして違うことに使ったほうがよいという考えの人も大勢いると思います。そんな中で、国際協力事業に関して少しでも勘違いやあいまいな意見を持っている人に帰国後は事実・現状を伝え、1人1人ができる国際協力を探していきたいと思いました。



日本と東ティモールの協力の証



コーヒー農場で働く人たち

### ●視察後の心境

この視察でたくさんの方の日本人の努力を見てきました。それと同時に、未来のために頑張ろうとする東ティモールの人々の姿も見る事ができました。専門家の方、青年海外協力隊の方、1人1人にドラマがあり苦勞があることがわかりました。

青年海外協力隊の方と話をしたときの「自分でやることを探さなければならない」という言葉が印象に残っています。私の中のイメージでは、前任者の活動は引き継ぎがなされ、2年間の派遣中の活動は提示されていて、それに取り組んでいくのだと思っていました。しかし現実には、引き継ぎなどはほとんどなされず、自分でいま何が必要なのか、何をしていかなければならないのかを考えて取り組んでいくそうです。すなわち、していかないといけないことが見つかった人は前進していきませんが、したいことがわからなくなれば途中帰国をしたり、たとえ任期の最後まで活動を継続しても2年間の成果が見られなかったりすることもあるそうです。そのような場合、厳しい言い方をすれば、税金を無駄に投資しているという人もいるかもしれません。しかし、この人たちは国を背負って活動を行い、成果はあまり出ないかもしれませんが、相手国に対して努力しているということと、目には見えにくいところで相手国に変化があることを少しでも多くの日本人に知ってほしいと思いました。

東ティモールで働いている日本人は、本当に東ティモールの未来を考えながら仕事をされていました。みなさん口をそろえて言われていたのは、「現地の人と一緒に!!」という言葉です。そして、部屋に集めて座学で教えることだけでは絶対にうまく伝えることはできないとも言われました。現地の人に寄り添い、必ず一緒に作業をされていました。そうすることで、実際に日本人の作業を見ることができるので教えられる側の上達も早いし、双方のコミュニケーションも円滑です。そこで、私がすごいな!と感じたことは、日本人の人たちも指導しながら、現地の人から学べることを吸収していることです。絶対に上から目線ではなく、同じ目線で仕事をされていることにとっても感銘を受けました。

この派遣が決まってからずっと考えていることがありました。それは、何が国際協力なのかということです。国際協力と聞くと、JICAや国連のような大規模な事業を行う国際協力やボランティア活動を考えていました。しかし、この派遣中にたくさんの方の海外で活躍されている方や現地の方々と交流する中で考えが変わり、少しずつその答えが見えてきたような気がしました。それは、その人1人1人に違った国際協力の仕方があるということです。私であれば、大学で今回の経験を学生に伝えていくことやサークルでカンボジアへの教育支援活動を継続して行うことなどが挙げられます。また、私はこれから教育者を志すので、子どもたちに一生をかけて自分の学んできたことを国際理解教育として教えていかなければならないと考えています。これらのことは、とても小さいことかもしれませんが、しかし、1人1人が国際協力を考え、取り組もうとする姿勢が必要なのだと考えます。自分ができることを多くの方が自分から自発的に行っていけば、そこがより良い国際協力の場になっていくのだと学ぶことができました。

### ●みなさんへのメッセージ

この派遣の経験から、ODAへの見方が大いに変わりました。国民1人あたり約5000円負担していることが、とても有意義だと感じました。それは、東ティモールで、身を削りながら頑張る日本人に出会ったり、自国の未来を考えながら努力している東ティモール人に出会ったりしたからです。ODAは東ティモールにおいて、人々の役に立つことに繋がっていました。そして、そこに日本人がいなかったら、東ティモール人の今の生活はなかったと思います。実際に見て感じて、ODAは本当に必要なことだと感じました。

今回、この国際協力レポーター事業に関わって下さった皆様に本当に感謝しています。ありがとうございました。そして、この報告書を読んでいただき、少しでも国際協力に興味をもっていただければ幸いです。



東ティモールの空港での1枚